

校内OJTにおけるミドルリーダーの役割 ～若手教員の育成を目指して～

山田 晃

金沢大学大学院教職実践研究科 学校マネジメントコース

【概要】本研究は、校内におけるOJTを通して、若手を中心とした教員の教師力の向上を図るとともに、OJTを企画・運営する立場にあるミドルリーダーの役割について考察するものである。教員の大量退職・大量採用により、急激な世代交代の時期を迎えている現在の学校現場において、校内研修を中心とした職場におけるOJTは、若手が抱える不安や疑問を解消し、若手教員の指導力向上に対して有益であるとともに、若手とベテランとをつなぐ上でも効果的であることが分かった。また、若手とベテランのコミュニケーションが豊かになり、学校が活性化し、若手自身が自信をもって会議等で発言する場も多く見られるようになってきた。ミドルリーダーの役割としては、「つくる」「つなぐ」「つたえる」「つづける」の4点が重要になってくることも分かった。

I. はじめに

『第2期石川の教育振興基本計画（2016→2020）の現状と課題』の中で挙げられているように「本県では、教員の大量退職・大量採用により、教員の急激な世代交代の時期を迎えており、ベテラン教員の指導力の継承と、若手教員をはじめとする現職教員の指導力の向上が喫緊の課題」となっている。また、新規採用者が増える中、初任者をはじめとする、若手教員の実践的な指導力の育成が肝要であり、様々な学校を取り巻く課題に対応できる力をつけることが求められている。

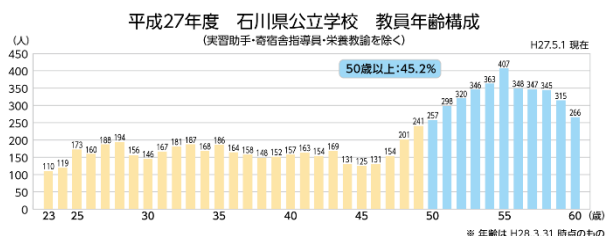


図1 石川県教員の年齢構成

そして、平成24年8月28日の中央教育審議会答申『教職生活全体を通じた教員の資質能力の総合的な向上方策について』においても、「教職生活全体を通じて、実践的指導力等を高めるとともに、社会の急速な進展の中で、知識・

技能の絶えざる刷新が必要なことから、教員が探求力を持ち、学び続ける存在であることが不可欠である」として、「学び続ける教員像」の確立を求めている。

そこで、日常の職務を遂行する中で教員の資質向上を図るための取組である、「学校におけるOJT（職場内研修）」に着目していきたいと考えた。OJT（On the Job Training）とは、一般的に「上司や先輩が、部下や後輩に対して、仕事を通じて職務に必要な能力（知識・技術（技能）・態度）を計画的・重点的に育成する努力の過程」（岡部博 1982）とされている。OJTは職務を遂行する中での人材育成であり、校内において短時間でできること、一人一人の能力に応じた具体的な支援ができること、支援される教員と支援する教員の両方が学び合えるなど様々な利点が挙げられる。

II. 研究の内容

1. 研究内容

（1）内灘町の全小学校においてアンケート調査を行い、教員としてどんなことに悩み感や困り感を持っているのかを傾向としてつかみ、本校における校内OJTの実施計画を作成する。

(2) 以下の3点をねらいとしてOJTを実施する。

①集団としての教師力向上を図る。

校内研修会ならびに学力向上ロードマップに則って実施する。

②個別に実施する中で、悩みに即した指導を行う。

対象者の実態に合わせて、個別または少人数で実施する。

③ミドルのつながりの深化を図る。

運営委員会または、校務部会の中でミドルリーダー同士の話し合いの場を設定し、共通理解を深める。

(3) 教員への聞き取り調査・アンケート調査を行い、OJTを通して「学習指導」「学級経営力」などに向上が見られたか、どのOJTが効果的であったかなどを中心に考察する。また、管理職の意見、思いを聞く中で、職場の雰囲気がどう変わったか、今後に向けてさらに発展させるための手立てについても検証を図る。

Ⅲ. 研究の仮説

1. 若手教員育成のために意識的、計画的、継続的にOJTを実践することで、対象若手教員の事前、事後の資質・能力に関する自己評価が変容する。
2. 若手教員育成のために意識的、計画的、継続的にOJTを実践することは、対象若手教員及びOJTに携わる教員間の同僚性・協働性を高める機会になる。
3. OJTを運用する中で、ミドルリーダー同士のつながりが深まり、職員室の会話が増えることで職場の活性化が見られる。また、普段からのつながりが深まり、ベテランと若手の「壁」が低くなることで、研修会などがより充実する。

Ⅳ. 実践の概要と結果

1. 事前調査

2017年2月に、内灘町の全小学校の教員を対象にアンケート調査を行った。調査の結果、次のようなことが明らかとなった。

(1) 教員の若返りが進んでいること。内灘町に関しては、29歳以下が30%、30～39歳が28%と、39歳以下が約6割を占める結果となった。

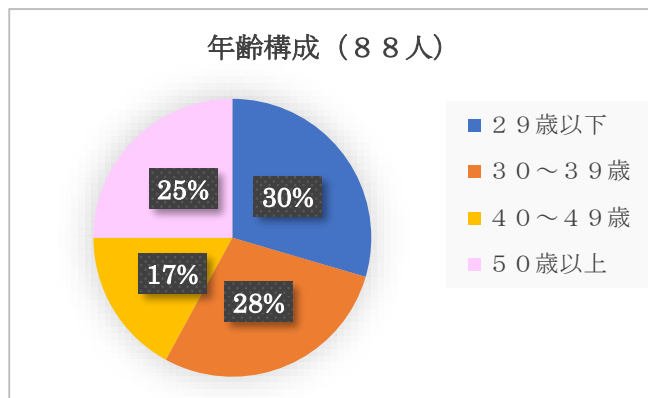


図2 内灘町小学校教員の年齢構成

また、経験年数別の割合を見ると、1～3年目が18%、4～6年目が20%、7～10年目が13%と、10年未満の教員が半数を占めている。

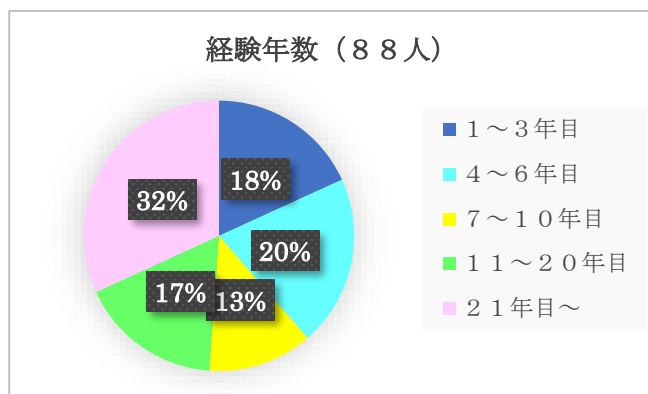
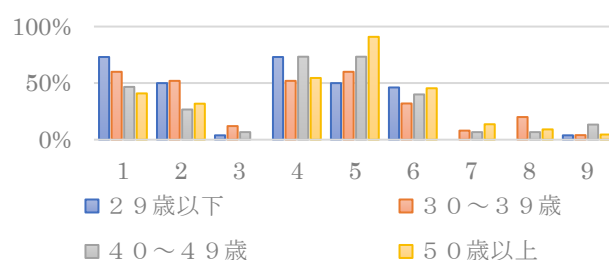


図3 内灘町小学校教員の経験年数

(2) 教育活動における困り感、悩みについては、どの年代においても「学習指導に関わ

表1 教育活動での困り感、悩み



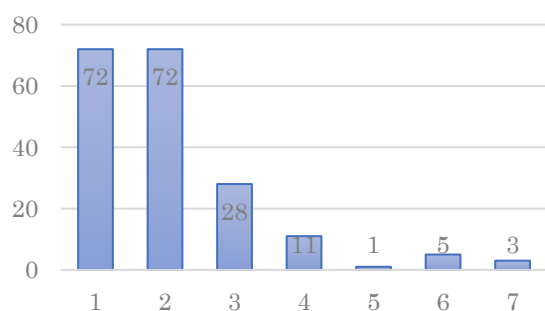
- | | |
|----------------------------|------------------|
| 1. 学習指導に関わること | 2. 学級経営に関わること |
| 3. 特別活動に関わること | 4. 生活・生徒指導に関わること |
| 5. 特別な支援を必要とする児童への指導に関わること | |
| 6. 保護者への対応に関わること | 7. 職場の人間関係に関わること |
| 8. その他 | 9. 特になし |

表1 教育活動での困り感、悩み

ること」「学級経営に関わること」「生活・生徒指導に関わること」「特別な支援を要する児童への対応に関すること」「保護者への対応に関すること」の5項目を挙げている教員が多かった。

- (3) OJTを実施していく上で、先生方が課題に挙げたことは、「個々の仕事が忙しく、新たな時間を設定することが難しい」ということであった。

表2 OJT推進への課題



- | | |
|-------------------------|--------|
| 1. 個々の仕事が忙しく余裕がない | |
| 2. 新たな時間を設定する余裕がない | |
| 3. 教え合い、学び合う取組への負担感が大きい | |
| 4. 推進するリーダーがない | |
| 5. その必要性を感じない、理解できない | |
| 6. 教え合う雰囲気ができていない | 7. その他 |

表2 OJT推進への課題

2. 実践

(1) 実践を行うにあたって

事前調査の結果を踏まえ、本研究では以下のように実践していくこととした。

- ①【つくる】本校の既存の校内研修をベースとして実施計画を作成し、実施していく。(学力向上ロードマップに記載。)校内研修という形をとるため、対象者は基本全教

員となるが、内容に応じて、若手(35歳以下)に対象を絞り、実践を行っていく。

- ②【つなぐ】外部講師を招聘し、研修会を行う中で、教員の資質の向上を図る。

- ③【つたえる】個別に行うOJTとして、今年度、同学年の隣の学級を担当する先生(6年目、初の6年担任)を対象とし、適宜アドバイスや支援を行っていくことで検証していく。

- ④【つなぐ、つたえる】OJT通信を定期的に発行し、教師力の向上を図る。

- ⑤4月の職員会議において、OJTの目的、

- 内容、日程等について提案し、周知を図る。

- ⑥計画の作成にあたっては、若手のニーズに応じたもの、行事等を踏まえた、よりタイムリーなものを行うこととする。

表3 校内OJTについて

2017.4.6
学習指導部 山田あ

- 目的
 - ・校内研修を基本に、ベテラン・中堅層の指導力を若手に伝え、若手の教師力の向上を図る。
 - ・さまざまな指導法、指導技術の交流を通して、職員間のつながりを深める。
- 日程
 - ・毎月第4週目の金曜日を基本とし、30分程度の時間で行えるものとする。
 - ・若手のニーズ、その時々の流れに沿ったテーマを設定し、より実効性の高いものと考えて適宜実施する。
 - ・個々の先生の困り感、悩みに対応し、個別に実施することも考えています。
- 内容(おおよその予定)
 - 4月…学級開き(学級経営、保護者対応について)
 - 5月…器械運動指導の方法・注意すべきことなど
 - 6月…ふらっと週間①(相互授業参観)
 - 7月…通知表の記入、個人懇談の持ち方について
 - 8月…生徒指導の在り方(配慮を要する児童、気になる児童への対応についてを中心)
 - 9月…運動会に向けて(全体指導全般)、長期休暇明けの学級づくり
 - 10月…校内板書・掲示ツアー
 - 11月…ふらっと週間②(相互授業参観)
 - 12月…授業づくりについて
 - 1月…長期休暇明けの学級づくり(来年度に向けての学級づくり)
 - 2月…指導要録の記入について
- その他
 - ・「OJT通信(仮名)」を定期的に発行する予定
 - ・各先生方の得意分野をぜひ生かしていきたいと考えています。講師をお願いすることもあると思いますので、よろしくお願いします。

表3 校内OJTについて(職員会議提案用)

(2) 実践

①第1回校内OJT

実施日：平成29年4月4日(火)

テーマ：『学級開き』について

対象者：35歳以下+希望者(17名参加)

方法：講義形式

内容：

- (i)学級開きと最初の一週間の取り組みの意義について

- ・新年度を迎え不安を抱えているのは子どもも同じ。子どもの思いにできるだけ寄り添った「担任第一声」を心掛けること。

(ii) 具体的な方途

ア. 担任第一声

- ・何を一番に伝えるか。
- ・どのように伝えるか。
- ・具体的な姿を語る。

イ. 学級開きからの一週間

- ・徹底すべきは何か。
- ・意欲や価値を語る。
- ・一年間の高まりを思い描いて。

(iii) 準備しておくこと

- ・子どもの顔と名前を覚える。
- ・ねぶっこシート（児童支援カード）に必ず目を通す。
- ・黒板に書く文章を考える。伝えたいことをより明確に。
- ・最初の授業を特に大切にする。授業が命。

(iv) 子ども達との関係作りについて

- ・子どもとできる限り遊ぶ。
- ・子ども全員と1日1回は話すことを心掛ける。
- ・傾聴。子どもの願いをしっかりと聞き、受け止める。
- ・「先生—子ども」の関係をとにかく守る。
- ・全体を見る意識を常に持つこと。
- ・許されないことに対しては厳しく指導する。感情に任せての指導はしない。

◎今年度の合言葉『一丸となる』にもつながるが、全校での約束、学年での約束をしっかり意識すること。

わからないこと、迷った時にはすぐに学年で相談すること。たくさんの先輩が本校にはいる。「人に聞く」ことを遠慮しないように。

(v) ふり返りから

- ・(1-1)最初の1週間は、先生の思いを伝え、子どもとの関係を作る大変重要な期間であることがよくわかりました。しっかりと準備をし、気を引き締めて頑張ります。

- ・(1-2)学級開きの準備で「何とかやる」と手抜きをしていたとことを反省しました。「子ども達にとってはたった1人の担任」ということをもっと心に留めて、1/34でなくて、一人一人を大切にしていきたいなと思いました。まず、顔写真を見ます。

- ・(1-3)1年の始まりに、教師側がどんな思いを持って何を大切にしていきたいのか自分の中でビジョンを明確にしておくことが今までは弱かったなと思います。級外として、各学年、各クラスとよい関係を築き、よい授業を作っていくために、新年度の数日間、授業開きに向けしっかり準備していきたいと思います。とても勉強になりました。

- ・(1-4)子ども達と共に過ごす1年の中で、大切なポイントが整理できたいい時間になりました。自分はこの1年で「先生—子ども」の関係作りをしっかりしていけないと感じます。子ども達一人一人に寄り添い、思いを伝え合うことのできる関係になれるよう、どう先生としてつながっていくことが大切か意識し続ける1年になるように頑張りたいと思いました。今後も経験の中で見えてきた事を、具体的な事例を交えて聞けると嬉しいです。またよろしくお願いします。

(vi) 省察

4月4日という大変忙しく、先生方にとっては本当に時間が惜しい中での実施となったが、希望者を含め多くの先生方に参加していただくことができた。「学級開き」に際して、自分の経験からこれまでの大切にしてきたことを中心に行った。子ども達との出会いは本当に大切である。1-2、1-3のふり返りにあるように、その思いをしっかりと「つたえる」ことができたように思う。

1回目の研修ではあったが、1-4のふり返りには「今後も具体的な事例を交えて学びた

い」とあった。このことから時間も無い中、忙しい中ではあるが、若手は「学びたい」という気持ちをすごく持っていることを実感した。限られた時間の中で、何をどのように伝えていくのか、より検討を重ね、今後も実施していきたい。



②第2回校内OJT

実施日：平成29年4月27日（木）

テーマ：生活科・総合的な学習校内研修会

対象者：全教員（30名参加）

方法：外部講師による講話、演習

内容：

（i）金沢大学 松田淑子教授による講話
「総合的な学習の時間をブラッシュアップ！」

- ・福井大学の学生の卒業論文からキーワードは『主体性』、探究の必然性ストーリー性と繰り返りのある探究のプロセス（学びの質 資質・能力）
- ・総合は、探究的な見方・考え方を育てる時間である。

（ii）各学年に分かれて生活科、総合的な学習のカリキュラムの検討
松田教授から適宜アドバイスをいただきながら行った。

（iii）ふり返りから

- ・（2-1）総合を愛する先生の熱いお話を聞いて、及び腰だった気持ちが前向きになりました。大根布の子ども達に、どこまで自由度を持たせられる先生達

か、とても興味があります。総合や特活で主体性を育てず、教科だけで主体性を育てようとするのは、子どもに無理な要求なのだと改めて感じました。

- ・（2-2）総合の授業で何をしたいかまったく分かっていなかったのですが、松田教授とお話をして、どんなことをしたら良いのか、少しイメージできました。そして、わくわくしてきました。
- ・（2-3）総合的な学習の時間で思考力・判断力・表現力を養い、学び方を身に付けさせることで、教科の学力が向上するという事に同感です。（子どもは課題について探究しているけれど、同時に先生の力が高まっていくという意味で副産物理論と名付けました。）
- ・（2-4）総合が「探究」を重視し、子どもの主体性からどんどん進めていく学習だという事がよく分かりました。私は総合の授業を受けたことがありますが、内容をあまり覚えていなかったもので、大きくなって思い出せるような総合の授業をしていきたいと思いました。

（iv）省察

今年度、秋に控えた生活科・総合的な学習の時間の公開発表会に向けて、金沢大学の松田淑子教授をお招きして、研修会を実施した。2-2のふり返りからもわかるように、総合的な学習の時間をいかに進めていけばよいのか、不安を抱えている先生が多くいた。総合的な学習の時間に何を大切にしていけばよいのか、子どもとともにどのように学びを深めていけばよいのかについて、詳しくお話を伺うことができた。現場の教員だけで、学びを深めることは難しいことも多々ある。その中で、今回のように外部講師をお招きして、様々な視点から学びを得る機会を設けることは本当に有効であると感じた。また、この研修を通し

て、秋の公開発表までの期間、松田教授にはいろいろとご示唆をいただくことになっていく。外部と学校とを「つなぐ」意味でも、今回の研修は実り多きものとなったように思う。



③第3回校内OJT

実施日：平成29年5月24日（水）

テーマ：体育科の指導・器械運動について

対象者：35歳以下+希望者（11名参加）

方法：講義、実技

内容：

（i）体育科の指導について

「体育の授業は7：2：1」

・7＝30分の運動　2＝10分で準備や片付け、作戦タイム　1＝5分　教師の説明

「よりよい授業づくりに向けて・・・毎時間の授業をふり返る3つの視点」

ア：ねらいは達成できたか（授業者の立場で）

イ：子ども達は運動の量と質に満足していたか（子どもの立場で）

ウ：学習規律は確立していたか（両者の立場で）

「時間や場の工夫について」

・休み時間の過ごし方 ※子どもとともに遊ぶ時間をぜひとる。

・行事の活用（個々の取り組みをクラス全体の取り組みに）。

（ii）器械運動の指導にあたって

「準備運動の工夫」

・主運動につながるように。ストレッチ的な要素も含めながら。

・整理体操も大切にすること。特に首の運動を。

「場の工夫」

・ガムテープ、ビニールテープで出来ること。

・坂道マット、マットの幅を細くする。タオルを使用する。

「ちょっとした小道具で意識付けを」

・手形、目をマットの上に置くだけでも子どもの意識が変わる。

「実技指導」

・マット、鉄棒を中心に技の指導法を。

（iii）ふり返りから

・（3-1）マットや鉄棒の準備運動の仕方や、技をできるようにするための手立て、指導のポイントがよく分かりました。

・（3-2）具体的な指導例を教えていただき、とても分かりやすかったです。器械運動の際に、準備運動として取り入れていきたいと思います。ありがとうございました。

→早速、鉄棒で取り入れてみましたが、逆上がりで4人できるようになりました。（6年生）

・（3-3）器械運動交歓会に向けて2年間指導していましたが、この運動が逆上がりにつながるなどの系統性を意識することができていなかったと感じました。何のためのアップかしっかり意図を持って指導していくことの大切さに気づくことができました。

・（3-4）できる子やできない子をどのように他の子ども達に見せていくのかが大切なのだとよく分かりました。子ども達同士での学び合いがうまくできるよう、マットにテープをはるなど、

教師の具体的な支援を知ることができ、とても勉強になりました。

- ・(3-5) 体育の準備運動や指導のポイントを、実技を交えて教えて下さったことで、とても分かりやすかったです。逆上がりを1人でも多くできるようにできたらいいな！と思いました。難しいですが…。跳び箱の指導についても知れるとよかったです。
- ・(3-6) 時間がない中、レジュメから指導までありがとうございました。時間が短かったのが残念でしたが、またいろいろ教えて下さい。

(iv) 省察

6月に予定されている内灘町器械運動交歓会に向けて、器械運動を中心に体育科の授業づくりについて実施した。小学校では、ほぼ全ての教員が「体育科」の指導に当たらなければならない。今回の研修では、時間の使い方や効果的な準備運動の在り方について指導を行った。20分足らずという大変短い時間の中であったが、若手の悩みを聞くことや、技の指導法についてなど、濃い内容で行うことができたように思う。(3-2)のように、早速授業で実践し、効果が得られたという事例もあり、子ども達の力を伸ばすことに繋がっていることを実感できた。

短い時間の中で、どのように行うことが効率よく学べるのかを考えた時に、後でじっくり読み返すことができる資料等が必要になってくるのではないかと感じた。

④第4回校内OJT

実施日：平成29年6月1日（水）

テーマ：保護者対応について

対象者：35歳以下

※急な会議のため実施できず。資料のみ配布。

⑤第5回校内OJT

実施日：平成29年7月12日（水）

テーマ：通知表作成・保護者面談について

対象者：35歳以下+希望者（17名参加）

方法：アンケート、資料による講義形式

内容：

(i) 通知表作成について

- ・絶対評価と相対評価の違いについて
- ・本校の通知表作成についての確認

(ii) 保護者面談について

- ・保護者面談は年に2回しかない大切な機会である。子どもの成長につなげるために、よりよい話し合いの場になるようにしよう。
- ・ピア・サポートの回答から、4つの質問をピックアップして、それぞれの回答をみんなで考えた後、先輩教師からの回答を提示した。「まず何から？」
「時間を守るには？」「伝えるにくいことをどのように伝えるか」「机の配置」などについて話し合った。
- ・大切なこととして、「誠実に」「親身に」「時間通りに」「具体的に」のキーワードを挙げながら共通理解を図った。

(iii) ふり返りから

- ・(5-1) 通知表渡しの「困った！」について、詳しく教えていただけたのでよかったです。今まであまり教えていただく機会がなかったので、いろいろな先生の対応を知ることができて、とても心強いです。ありがとうございました。
- ・(5-2) 正直、通知表渡しは少し心配です。何を言えばよいか、去年も悩んでいました。でも、去年と同じように、ほめてから話を続けていけばいいと分かったので、今年もよい面談ができるように、子どものよい所を1つでも多く言えるように準備していこうと思います。
- ・(5-3) 保護者に関する内容は、なかなか話を聞く機会がなかったので、今日聞けてとてもよかったです。教師と保護

者とそれぞれ立場は違っても、目標は同じ「子どものために」であるということ。教師がしっかり持って、共感の気持ち、一緒に頑張るという気持ちを大切にすることが必要なのだなと改めて感じました。

- ・(5-4) 今まで話しやすい保護者の方ばかりだったので、どんな保護者がいて、どんな対応をすればいいのか聞けて、参考になりました。
- ・(5-5) 普段、保護者の方と接する機会は少ないですが、今回のOJTでは、保護者の方の目線で考えさせられることも多々あり、電話対応にも応用できそうなこともあったので、今後に生かしていきたいと思います。
- ・(5-6) 他の先生方の話を聞くことができ、とても参考になりました。相手のことを考えて、接していくことが大切だな…と感じました。
- ・(5-7) 具体的な保護者面談のことについて知ることができて良かったです。去年は、あいさつは意識して行うようにしていたのですが、最後の出口までという意識がなかったので、気をつけたいと感じました。
- ・(5-8) 保護者と子どものために何ができるのかを考える前向きな時間として捉えようと思いました。経験談もたくさん聞くことができ、保護者面談の具体的なイメージを持つことができました。共感・傾聴を心掛けて臨もうと思います。
- ・(5-9) いろいろな考え方があって面白いなと思いました。それぞれのキャラクターに合わせた姿勢で、保護者と向かい合えればいいなと思います。
- ・(5-10) 通知表渡しの際にすぐ実践できる事も多く聞けてうれしかったです。いろいろ考える部分もあり、悩みを共有して頂けたのが、すごく勉強になりました。

・(5-11) ベテランの先生の対応や考え方を知るととてもよい機会だったと思います。自分の初任の頃もあったらよかったなと思います。

・(5-12) 自分が疑問に思っていたことが解消されました。日頃から子どものことをよく見て、理解していけば、堂々と通知表渡しに臨めると思うので、授業研究を頑張ります。

・(5-13) 何をどうすればよいか、先輩の先生方からの具体的なアドバイスが分かりやすかったです。

・(5-14) 通知表渡しはまだ先・・・と思っていましたが、いろいろ準備しないといけないと気付きました。頑張ります。保護者対応が苦手なので、少しでもベテランの方の意見が聞けてよかったです。

・(5-15) たくさんの項目に丁寧に答えて頂いてありがとうございます！参考にして面談を乗り越えていきたいと思います。

(iv) 省察

OJTに際して、「ピア・サポート」と題して、「不安に感じていること」「悩み」を中心に、アンケートを若手の先生方に実施し、通知表作成、保護者懇談に対する悩み、不安をたくさん挙げてもらった。その質問に対して、ベテランの先生方に回答して頂き、OJTの資料として活用した。若手がどのような悩みを抱え、懇談に際して不安に感じているのかをベテランの先生方で共有し、よりよい懇談となるように実施した。若手からはとても深い悩みがあげられ、ベテランの回答もとても親身になったものであった。(5-1) (5-2)にもあるように、忙しい日々の中で、なかなか「相談する」ことも出来ない現状がある。ベテランの経験から得た知見を、若手に「つたえる」こと、そして、教員同士を「つなぐ」役割を果たせた時間となったように思う。ベテランの先生方の間では、「私たちはこんな機

会はなかったし、若手はいい学びが出来ているね。」と職員室で会話するなど、OJTに対する好意的な意見も得られた。

⑥第6回校内OJT

実施日：平成29年8月21日（月）

テーマ：「Q-U活用にあたって&事例検討」

対象者：全教員（23名参加）

方 法：講義、演習

内 容：本校教諭松田先生を講師として実施

（i）「Q-Uテスト結果の活用について」

ア．Q-Uテストの結果の見方について

イ．全体の傾向の類型について

- ・満足型、管理型、なれあい型、荒れ始め型、崩壊型、拡散型

ウ．事例検討の手法について

エ．話し合いの際のポイントについて

（ii）事例検討会

- ・教員を6グループに分け、それぞれ1名が分析したものをもとに、検討する。
- ・上記のア～エで学習したことをもとに、分析者の話を聞き、よりよいクラス作りについて意見交流を行い、考えを深める。

（iii）会の様子



⑦第7回校内OJT

実施日：平成29年9月4日（月）

テーマ：「運動会に向けて（全体指導全般）」

対象者：35歳以下+希望者（22名参加）

方 法：講義、実技

内 容：

（i）「行進について」※実技を伴って

ア．足踏み

イ．歩く

ウ．駆け足

（ii）礼、回れ右、気をつけなど

（iii）運動会の全体指導にあたって

- ・指令台への登壇の仕方
- ・共通理解を図りたいこと

（iv）係の児童への指導について

- ・基本動作は、かけあし、待機は立膝か体育座り。
- ・返事は大きくはっきり行う。
- ・放送は通常よりゆっくり、間をおく。語尾に気をつけさせる。マイクを通じた練習の時間を十分に確保すること。
- ・準備体操・整理体操の師範は大きな動作を。手足をしっかりと伸ばすことを意識させる。

（v）会の様子



（vi）ふり返りから

- ・（7-1）行進の仕方（踏み出す足、終わる足）について考えたことがなかったので、よい勉強になった。歩くときに、足がずれたのをどうなおすのかも勉強になった。全体指導について、共通理解を図ることができたのでよかった。

た。

- ・(7-2) 運動会の指導が初めてなので、行進の仕方、回れ右の仕方などを細かく指導することで、子ども達の一体感が生まれ、よりよい運動会につながるのだと思いました。意識して指導していきたいと思います。
- ・(7-3) 今まででは足の出し方が曖昧だったけれど、今日の会で統一した歩き方を理解できたので、よかった。
- ・(7-4) 足踏みのツーステップや、止まってそろえることを初めて聞き勉強になりました。マイクを通した時の全体への指導について気をつけたいと思います。
- ・(7-5) 運動会に向けて、子ども達に教えることを再確認できたので、これからはがんばりたいと思いました。
- ・(7-6) このように共通理解をしっかりと図ることで、子ども達にとっても同じ指導となり、積み上げがより一層図られると感じた。今までは感覚で指導していた部分も明確になったのでいい時間となった。

(v) 省察

学校行事の中でも大きな行事の一つである「運動会」を前にして行った。若手の先生方にとって、学年全体の前で指導を行うことはとても緊張感を伴うものである。少しでも自信を持って行えるように、そして共通理解を図った上で指導できるようにすることをねらいとして実施した。(7-1) (7-2) のように、若手の自信につなげることが出来たように思う。また、行進の仕方など基本的な部分を押さえると共に、全体をどのように見ていくことが大切なのかということについてもしっかりと話すことができた。(つたえる)

運動会当日までの練習風景や、当日に関しても若手が子ども達と一緒に生

き生きと活動している様子が見られた。教師が自信を持って、子どもの前に立つことの重要性に改めて気づくことができた。

⑧第8回校内OJT

実施日：平成29年11月上旬～

テーマ：「授業づくりについて考えよう

～板書から学ぼう～」

対象者：35歳以下+希望者

方法：授業後の板書をもとに演習

内容：若手の板書から意見を交流する中で、授業づくりについて考える

- (i) 授業者に本時の授業について話してもらい、どこに悩みを感じたのか、どこがうまくいったと思うのか、あるいはうまくいかなかったと思うのかについて共通理解を図る。
- (ii) 授業者の思いを受けて、より子ども達の思考の流れに沿った板書にするには、どのような工夫が考えられるのか、改善するとよい点などについて参加者を含めて意見を交流する。
- (iii) 課題設定、深める場面、まとめの場面など、それぞれの場面について、板書を通して授業の流れ全般について考える場とする。
- (iv) 会の様子



(v) 省察

どの会においてもとても活発な議論が交

わされた。若手の先生を中心に自分が思ったこと、疑問に感じたことを授業者にぶつけ、共に考えることができていた。今回の企画にあたり、授業者と同学年の学年主任に参加を要請し、適宜アドバイスをしていただいた。とても的確なアドバイスで、より授業づくりについて考える一助となっていた。

授業づくりをどのようにして行っていくのか、若手の授業に対する意識を高めるにはどうすればよいのか、ということを前提として行ったOJTであったが、自分自身、大変学ぶべきことが多く、また、授業について考えることやみんなで意見を交わすことの楽しさを実感することができた。大変忙しい中にもかかわらず、毎回多くの先生方に足を運んでもらえたことは、先生方の悩みの深さを表しているとともに、大根布小学校の職員の「和」の強さ、温かさを感じることもできた。インフルエンザの流行もあり、実施できなかった部分もあるが、30分という短い時間で行えるこのOJTは、今後も実施していければと考える。また、最終目標でもある、若手自身が自分達で声を掛け合い、行っていけるようにしかけていきたいと思う。

⑨第9回校内OJT

実施日：平成29年11月27日（月）

テーマ：「特別支援教育について」

対象者：全教員（28名参加）

方 法：外部講師による講話、演習

内 容：金沢大学 武居 渡教授による演習と講話

（i）演習 「発達障害を体験してみよう」

- ・読みに困難があるお子さん、書きに困難のあるお子さんの例
- ・注意力、対人関係に問題のあるお子さんの例
- ・ルールブック1 （話が分からない、理解できない子どもはどのような状況か）

（ii）講話

「気になる子どもの配慮と支援」

- ・LD、ADHD、アスペルガー障害が疑われる子どもに対する教室内的支援
 - ・2つの平等（機会の平等・結果の平等）をどう考えるか
 - ・合理的配慮について。ポイントは？また、合理的配慮の厳しさ、教育の中でどのように考えていくべきか
- （iii）ふり返りから
- ・（9-1）今まで何となく配慮していたのですが、「子どもに合わせた配慮」「困り感に合わせた配慮」を考えていくことが大切だと思いました。その上で、ユニバーサルデザインとして、まずできることをしっかりやっていこうと思いました。
 - ・（9-2）自己認識、自己分析、とても大切だなと思いました。
 - ・（9-3）自分自身が体験することで「こんなふう感じていたのか」と実感することができました。「機会の平等」、「結果の平等」この2つの平等の話がとても興味深かったです。自分自身、機会の平等の方に意識がいていた気がします。自分の考え方、やり方を大切にし、ぶれない思いをしっかり子ども達に伝えていきたいと思いました。
 - ・（9-4）読めない、書けない、聞けない（理解できない）児童が多いので、すごく勉強になりました。（黒板は、毎時間、跡が残らないように消すようにしています。）
 - ・（9-5）分からない子、困っている子がどんな感覚なのかが分かってよかった。理解の遅い子が多いので、支援の方法はすごく役立つと思います。ただ、本人の障害なのか、甘え（怠惰）なのかの見極めが難しいと思いました。
 - ・（9-6）授業を進めていく中で、児童それ

それに合った支援が必要なのだと改めて実感しました。広い視野を持ち、どこで何につまずいているのか、しっかり見取っていくことが自分には必要だと感じています。とても勉強になりました。ありがとうございました。

- ・(9-7) 演習は初めての体験でした。障害の理解は難しいと思いましたが、ていねいな信頼関係を築いていくことで理解していきたいと思いました。これからは結果の平等ということにも意識したいです。ありがとうございました。

(iv) 省察

「教育活動での困り感、悩み」のアンケートで意見が多かった「特別な支援を要する児童への対応」について、外部講師をお招きして実施した。(つなぐ) 武居教授には演習と講話をしていただき、特に演習部分では、実際に体験する中でたくさんの示唆を頂くことが出来た。機会の平等と結果の平等をどのように捉えるのか、合理的配慮に関する事など、自分自身の学び直しにもなった。

多くの先生が「本当に勉強になった。」という感想を残してくれた。校内研修において、このような外部講師をお招きし、新しい知見を得る、深める機会は本当に大切だと感じた。

⑩ O J T 通信の発行

時間的な制約が厳しい中で、定期的に O J T を実施し、学びを深めていくことは難しい。そこで、その都度、若手を中心にわたしが今まで蓄えてきた知見や、文献から得られた知識を通信として発行することで、より若手教員の伸びを図ろうと考えた。(つたえる) 月 1 回をめぐりに発行すること、よりタイムリーな話題を提供することを念頭に置き、作成、発行した。(つくる)

「学級開き 学級通信について」「水泳指導の在り方」「新学習指導要領について」など、様々な分野で発行することが出来た。若手からも「毎回の通信を楽しみにしている。」「水泳指導の通信は、実際にプールサイドまで持って行き、

指導に役立てました。」など、好意的な感想を得ることが出来た。また、研修会の内容を通信として発行することで、会に参加することが出来なかったベテランの先生方にも、若手の学びを知ってもらうなど、若手とベテランをつなぐことにも役立てることが出来たように思う。(つなぐ)

また、わたし自身大変忙しい中ではあったが、伝えたいことや職員みんなで共有した方がよいと感じたことを中心に、通信を発行することを継続してきた。継続する中で、自分の思いをより伝えることができたように思う。根気強く「つづける」ことがより効果的であると実感できた。

V. 実践を終えて

1. 学校長との面談から

本研究における校内 O J T を通して、学校長と面談を行った。その中で学校長からは「若手の先生たちの共同で研究しようとする意識ができたと思う。これまでは、学年チームの中の最年少という立場で、いつも遠慮がちで、決定したことを受けて指示のように子ども達に指導していたような感じが漂っていた。O J T で、聞くだけではなく、意見交換を行ってきたことで、自ら学級を何とかしよう、授業を何とか改善しようという意志が芽生えたようである。目力を感じられるようになった。」というコメントを頂いた。若手の力量が高まるだけではなく、教師としての成長を自ら求めていこうとする意欲を喚起できたように思う。また、「初任研担当指導教師以外のベテラン教師でも、若手を育てる意識を、共通にそして自然に持つ人が増えてきたように思う。」との感想からは、若手とベテランを「つなぐ」役割を果たせたこと、また、ベテラン教師の意識を高めることに繋がったと感じた。職員室内での会話の増加とともに、コミュニケーションが活発になり、雰囲気はよくなったとも感じた。

若手教員等の力量形成については、「保護者

対応について、自信のなさが解消される研修であった。通知表渡し、懇談においても、具体的な話の進め方が分かることで、見通しを持って臨めるようになった。」という感想を頂き、若手に自信を与えることが、教師力の向上に繋がったことを実感することができた。また、若手だけではなく全ての教員に対して、「若手を育てる意識ができた。校内研修に対する意識が受け身から『自らすること』に変わった。」との感想も頂き、今回、OJTをつづけた成果を感じ取ることができた。(つづける)

2. 若手のふり返しから

1月に全教員を対象として、OJTに対するアンケート調査を行った。「それぞれのOJTが自分の力を高めるために役立ったかどうか。」という視点でふり返ってもらった。どのOJTに対しても大変高い評価をしてもらうことができた。中でも、授業作りについて考えることを目的として行った「板書から学ぼう」では、多くの先生方から、「とても役立った」という評価をもらい、授業作りに対して考えることの大切さを知るとともに、若手教員の困り感、悩みの大きさを知ることにもなった。30代の女性からは「大学の先生が来て下さったり、得意分野を生かして教えて下さったりととても充実していた。」とのふり返しをもらい、外部とのつながりを作ることで得られる知見の大きさや、それぞれの得意分野を生かした研修の有用性についても確かめることができた。また、若手の多くは、「学べる機会が多かったことが嬉しかった。」とふり返っていた。忙しい日々ではあるが、このような機会を設け、教員同士での学び合いの場を設けていくことは本当に大切なことであると感じた。

年間を通して、同学年の隣の学級の先生との「つながり」を特に意識してきた。初めての6年担任として、初めの頃は緊張感の中、指導に当たっている様子が見られたが、アドバイスを適宜行くと同時に、様々な場面で悩みを聞いていく中で、表情にも余裕が生まれ、子ども達と

楽しく過ごす様子をたくさん見ることもできた。

VI. 成果と課題

成果としては、①若手教員が成長したこと、②職員間のコミュニケーションが豊かになり、学校が活気づいてきたこと、③研修を担当するミドルリーダー自身が成長したこと、④ミドルリーダーの役割として「つくる」「つなぐ」「つたえる」「つづける」ことが重要になってくることがわかったこと、の4点があげられる。特に④の4つの役割について、若返りが進む中で、管理職と若手、ベテランと若手を「つなぐ」パイプ役とならなければならないことや、ミドルリーダーとして、自分が持っている知見をしっかりと「つたえる」ことが、多忙な毎日を過ごす若手教師の力量形成だけではなく、心の安定につながるということがわかった。「つくる」過程を通して、ミドルリーダー自身が学び直しをするいい機会となり、自分自身の力量形成につながったことも大きな成果と言えるだろう。わたし自身のように「校内OJT担当」という役割が明確であることも研修をより充実させるためには有効であることがわかった。例えば、研究主任が今回のようなOJTを実施していくとなると、どうしても学校研究に重点を置いたものが多くなってしまう可能性が考えられる。学校研究も若手を成長させるためには必要ではあるが、わたしのように違う立場の人間がOJTを担当することで、若手の様々なニーズにより柔軟に対応していくことができるように感じた。また、明確な役割として与えられることで、若手も誰に相談すればよいのかがはっきりし、不安や悩みの解消につなげることができたのではないかと考えられる。

課題としては、次年度以降の継続性をどのように持たせていくのか(つづける)、担当者の負担をできるだけ少なくし、運営していくためにはどうすればよいのかということが考えられる。本研究において、わたし自身は「つながり」

「自身の力量形成」を意識し、楽しみながら実践にあたることができたように思う。ミドルリーダーが、高い意識を持ち、若手を育てていくことに使命感を持てるかが大きな課題となってくるように思う。

Ⅶ. 参考文献、引用文献

石川県教育委員会（2016）『第2期石川の教育の振興基本計画 2016→2020』

中央教育審議会答申（2012）『教職生活の全体を通じた教員の資質能力の総合的な向上方策について』

岡部博（1982）『企業内研修戦略』産能大学出版部

浅野良一編（2009）『学校におけるOJTの効果的な進め方』教育開発研究所

宮崎県教育委員会（2014）『学校における「OJT推進のための手引き」』

東京都教育委員会（2008）『OJTガイドライン～学校におけるOJTの実践～』